





中ノ新巻



諸国各句 一人一唱

近江之部

膳所

海山ノ錦とて流の花 酒  
水とて流るるある田ノ里  
あつる世壇のふあゆ山 怒誰  
山ノ入の類のふえはたえり 野

三



青月もやまをくし青月の花も 昌房  
雪あつて花もくろくも梅も 游刀

大津

も深ちるひをふくまひの回りの 園入  
此の房や牡丹のこの世より 維明  
珠もまわく水晶も 柳也 我笑  
そにむらひくまの夕れくれ 白鳳  
柔くもに産く柳あり 友のむ 袁立

青月の後おくれある 権子 万祖  
さかしく牡丹のこの世より 呂不  
月のくくもやしんを 権む 竜舌  
東流の波もせうし 権む 羽音  
橋ありて祈りかや 十山 伏 万水  
船放りて塵とともあれ 権む 素琴  
かきまわれと権む 権む 和角  
月夜の村らや 権むのふね連 寧陀



加賀之部

金沢 浅井川連中

志おさうりくし留よはらり 春のむ 中業  
 楳さりのんよまじりゆらり外 希因  
 風の波ち振るをこりりし柳を 柳司  
 ぼりけのらりらおまらぬゆら 馬川  
 穠妻のちるあふやうの月 安代  
 人のゆにこりりし涼 水まき 金桑

衣のまふ中のおいさやゆらり 中洞  
 おあげてく月のあふやうの上 菟舟  
 せかりりくせふはるる涼平松 九事  
 みほほのあふるるくし 庵取 完尔  
 らまらねらりりかひ回折のあふら 鳥和  
 せいとくはらりのあふや 天河 牛来  
 秋のの色とほわらぬやまの 標字  
 風やまらふ流るるあふら 湖文



水調子牛とらふと天河 維石  
起すらん舞うゆく海の奈 李仲  
故土の池もあはゆる橋 東政  
いさらの後を流るるを田の 藤吉

念は 庫川連中

白うのちりたえまゆに花手 素然  
まの舟のやち踏さくしん 市虎  
聲をなする富やあふに老の老 朗寺

湖の音と邪と入らるる月 九連  
むりの月ら橋さうちゆふ 美葉  
ぬさるる本のうらも津の旅 北亮  
まきのぬに強とけしる 柳丸 山隣

念は 安江連中

ちんちんあしとあしと 雛の林 逸町  
水音とあしとあしと 和清  
まきのぬとあしとの命と 柳丸 池桐



心ゆくもよこし藤はさかたを  
 紅金  
 ことしはゆるる月まはる  
 更中  
 神楽や松とまるとまはり  
 吾是  
 空ふちと物ふりせり舟の香  
 下緑  
 一ちうらみちるる花  
 凡曲

金沢 西條連中

白鷺ふもよとまはるる  
 丸林  
 舟もあけりて藤はさかた  
 荷凡

梅もさかたのあまのれは  
 守保  
 ちりぬると侍やあはる月  
 其終  
 子と抱くよのこもたはる  
 維周  
 船もさかたのあまのれは  
 万志  
 つつぬれはさかたのあまのれは  
 桃里  
 つつぬれはさかたのあまのれは  
 俣商  
 ぬもさかたのあまのれは  
 素凡  
 おもひの結をよこし  
 以仲



世治れんとて世のそとにまゝの  
白雲  
月をぬきとるるの勝れ 冥考  
甲子もろのふとにわらひの月 五并  
葉の花やまゝくちる葉の 佳ふ  
とらふともかたじけなく大蛇の 市中  
おもしろやとてはくしむるもの 至明  
高くとけりまゝくちる葉の 僧 生可

本吉

あふちげの喉のつづくねまふか 甲遊  
くれちまのくむせとる所のまゝ 梨兒  
一まおにくまに度あちかたよふ 二泉  
浦まゝとらふまゝのつれ 雉貝  
入おのまゝとらふてしむるまゝ 古的  
やと吐くしるやとまゝの月 素人  
えらひまゝのまゝとらふ月 葦垣



鴨のあし 雁さかしく 此水うれ 桐雨  
 牛牽て 田たあふ なる葉 柳風  
 卯のむら ちよく 津のうめ 呉五  
 水江や 木さよの 津此 男きり 刻と 山石  
 凡く くらり けり けり 花と 利 吾鳥  
 観念の 碑月 けり 火燈 うれ 若推  
 酔の 町と ちよく 志の ちよく 花 才 咄

大要さる

腰帯も けり ちよく ちよく 山 梅 石五  
 高く けり けり ちよく 山 花 波 缸  
 極ちよく 火燈 けり ちよく 山 捨 指  
 切敷も 透る ちよく ちよく 探 持 葉 圭  
 けり ちよく ちよく ちよく ちよく 友 硯  
 ちよく ちよく ちよく ちよく ちよく 雁 驢  
 けり 秋の 木と けり ちよく ちよく ちよく 竹 錦



りはし〜くさるゝの柳〜れ 一帆  
 中〜心の角〜ねあるはは〜し 梅石  
 小〜さな木の枝もちと〜さきさき 金英  
 芭蕉〜よめ神〜れや月のか〜く 馬紅  
 大橋らり 踏〜の中や〜世界 素葉  
 はあゆ花の〜れと夜〜や水の月 虎角  
 春〜とつ〜しあ〜はるやあ〜り 柳妖  
 世智の〜る〜と人〜き〜ら〜な〜り 雨笠

うる起の連〜入田の葉〜し〜れ 蘭雪  
 世の〜れ河とぬ〜さ〜し〜ぬ 足揚  
 菟兔〜月の名とあ〜こ〜ら〜る 雉泉

越中へ部

石動

呉服を〜し〜袖〜る〜ら〜る 糸巻  
 かしら場や子おめか〜し〜後〜し 寸長  
 あら〜るのや上柳あ〜ら〜る 意の 可水



檀特の花もかきする念仲は 香燭  
秋風も菊もかきするや 柿の花 右摘  
る鮎や瀬の流もちる一お鮎 西木  
人の目も二房子のほろや 若のむ 更商  
稲妻やある付流もちるはけ 巴前  
涼の月のむらさきや 鶯 鶯幸  
あぢの隣も雲や 白牡丹 鶯幸  
名月や富のねりも 鶯 鶯幸

鶯の宵中とききくれ 鶯の 可省  
仲りもあけりや 鶯の月 鶯泉  
風も花もあまの鞠場は 鶯 鶯泉  
る摘も取の体や 鶯の月 楚洞  
白平ふ神もかきするは 鶯 以仲  
流の流も本よりいも 花 耳様  
足のも夜食のトや 西 柳睦  
お起りあけりもあまの 鶯 乙文



あふふと息のかぐりや春の香 濠吹  
母の御くまをさうくまにら 方登

福光

夕貝の花やあぢくあぢく先 汶上  
心からりのゆり上やあぢく花 鳥雲  
村より緑妻のゆや春の音 路文  
風のゆれらんもきりけの音 飲之  
人間の園と春の目おろふ 丸言

ささげのふゆやれよ春の花 巴形  
空あける人と待きり春の秋 梅城  
おちよふひよ一おぢくも春の秋 柳士  
淋しよの骨よ涙きり春の秋 昌仙  
ここの春よとつらう一春の花 音次  
水色と夏よとつらふね 巴形

城ヶ

まらまらの中にまらまら 宣之



三十一  
あはれやまゝとかなんかもの長 汲及  
えりの言もあしや梅の花 宇木  
解の言や指しあしる雲の玉 邑氏  
嫁入し猶もあしをむゆりれ 其凡  
さり月しはしむかひもあし 兵秋

さるは

すげさの甲そよふ勢くはあし 十河  
る月や南の坊へ水の 坊 听之

あのをれゆりあし 陣光  
珠ぬきけて涙の柄移る 依中  
奥のらりあしあんの柳りれ 浮白  
打擲の隣りりあし柳りれ 路角  
空鱗の何許もあしをめ入 里凡  
此種の言もあしあし 甫尺  
遠近の田とかあしあし 故泊  
ちる中に附のいさあしあし 乙調



日之海のなつらくし唐の舟は舟支汝  
 挨拶し鯨のけしん舟墨くれ 旭可  
 新崎 瀬のり 場や又 志由  
 船のなつらくし舟や又 志由  
 桂のなつらくし舟の 志由  
 苗代や舟よあつたの 志由  
 卯のなつらくし舟の 志由  
 蓮の花涼し 舟のなつらくし 志由  
 如吹

唐人の舟言やあるお餅お 欽之  
 宮あつた風や柳のなつらくし 欽之  
 舟や舟のなつらくし 舟  
 一はくし舟の 舟  
 み月舟のなつらくし 舟  
 穂すし舟のなつらくし 舟  
 山嶺々舟のなつらくし 舟



氷見

麻苧ややくく万歳のあり地 路青  
米のまにを平と消しを念御 巴流  
柿末といひく山蓮や柿菓子 千林  
と食のまらや花うゑ末の飯 佳朴  
出がしりや暖氣の柿と二人尻 地刀  
あやち竹又人の陰しうあまふれ 海人  
柿子の口よあうくあゆくも芳の花 赤因

越とく金一乃せとるさげや ゆりのむ 杜亮  
お男廉もやうれおや田新時 係美

富山

無百合といけく暖まや赤加減 一庸  
新式のあしくまよりやを能さる お 花調  
葛のまにあるおへ背中あり也 お 扇漢  
おとらむ枝ありむもく お 木敏  
秋の色と袋の内のおん お 地江



枚のまかりなまのあせりいん 沙草  
 入つたりしもの日和も残る 上道  
 心な腹をさくるやけおけ 左鶴  
 花のまきとまのいし跡むはれ 随風  
 月影のまよとまきり縮むる 融  
 心おしめをむきあてや 藤の 如  
 夕まのまきとまきり 照るり 水富 有節  
 時さるまらてや 越のまほく 左鶴

照海のゆゆ後もまきりやま 作 故白  
 風の夜討やまきりまきり音 一空  
 おまきや抱あけまきりまきり 急六  
 神凡のまきりとまきりまきり 秀出  
 色かきまきりまきりまきり 河内木  
 管まきりまきりまきりまきり 万水  
 いままきりまきりまきりまきり 曾向  
 ねまきりまきりまきりまきり 竹ま



秋をよめさしらの花を 狩を 函朝  
 母衣武をよめおるをさる 柳の 雲色  
 雪のちりちや 葉はく 薪より 山遊  
 冬風の秋もかこもとはくく 僧行  
 金糸をねく山はとちくく 雪州  
 浦のくさく入てや 梅の花 葉醉  
 南風や 暮石の朝の 徒も力 白推  
 あらさるの波さや 吹く 渚あり 二河

魚津

はるるけ梅もさや 海はくれ 雲霧  
 穴よあふ 霧のあふる 法は 柳雨  
 ちる花や 又咲る 狩め 徒意  
 柳や木の ちりちく ちりちく 指丁  
 草原さくくも 今や 椿のおも 荏洞  
 不行や ちりちく ちりちく 翠中  
 献えくく 霧のあふる 雲色 雲之



山とては花とてはさしや 障花 雨穂  
 かのむのおもさしとて 山の帝 雨穂  
 およのらとてはさしや 一の楓 保遊  
 とてはさしやとてはさしや 山の帝 山青  
 不行やまはさしとて 中たす 明云  
 山とては花とてはさしや 一の楓 文水  
 山とては花とてはさしや 一の楓 建泉  
 深森とてはさしやとてはさしや 一の楓 葉七

経おや同じく硝子のあわし 鴨成  
 さいよに花あのおいしく 一の楓 星々  
 表のらや花とてはさしや 一の楓 方教  
 建水とてはさしやとてはさしや 一の楓 意謀  
 花あのおいしくとてはさしや 一の楓 巴嶽  
 さいよに花あのおいしくとてはさしや 一の楓 山青  
 名月や花とてはさしやとてはさしや 一の楓 貞子



花とらるゝとていと秘入の事なり 雨村  
も月のこゝろとて海女や花の事 俣屋

とせ

春あきくも春のあきや花の事 潜之  
朝一いふ事のこ入やまもま 若園  
ゆきゆきの方より梅の事なり 若五  
水帯のこゝろとて花の事なり 柳翠  
結一海もぬきとて追ひなり 松波

稲妻のあちくしとて花の事 扇之  
涼風や人のこゝろとて花の事 枝中

越ねく部

高田

動してゐるや花の事なり 香皓  
卯刻の静まりとて花の事 亮行  
白きとて花の事なり 逸十  
かくらゝの事や花の事なり 傳



春の月と戸と花とらの新と  
 松 通  
 梅の香と一命とちや梅月  
 仙枝  
 舟の香の七人きぬ一梅の心  
 荒  
 沖ののちやそのに毒の花  
 文と  
 唐橋と塔のなげとやかたつ  
 完更  
 蓮のちやにの界と鼻の先  
 巴流

春あつと暖さの  
 一きと梅  
 言は  
 花のちやとちや  
 疎不  
 凡乙

今町

春あねのちやとちやの京  
 羅子  
 花のちやと色や  
 依巴  
 探子に婦人からとるの香  
 盤泉  
 池のちやのまか命とゆ  
 中塩山  
 念師と内とちや  
 ちやおの香  
 胡凡







水のやいしちまふ川の枝 籬本  
 切れく種ひくあや山梅 白水  
 柳しらさるる藪やあ人の 呼風  
 炭くられ負さふあひ中 栗籬  
 仰さく花又とやさく淫般あ 豊長  
 為らんと錦はさむおれ 蒼紅  
 婦まゝと形ともあや大根り 山子  
 清しとやせちる池のあらく魚 仲有

清しとや土美の法の名あ 万谷  
 から表や名もくあく徒さ 松葉  
 けりんとあし等しく梅さ 之由  
 川裾く人のあし月 依風  
 骨あつやけあつと松の枝 風吹  
 糸と拾く海さく轉さく 一寺  
 糸さるく秋の海さく雲つる 一葉  
 馬市北あしとるさるあ 仙流



福妻の糸とおもや家の松 喜立  
 客人といらむさき 和風  
 ちし魚や狎くもの 湘水  
 草のこたへくはよねらる 純甫  
 秋のやまのふも一かた 依曲  
 けさねのささき 吾行  
 白梅や地よりさき 自有  
 ね糸とちねらりぬら 万里

櫻枝のさくらやあもや 碧笑  
 る月の糸帯りぬらり 童圃  
 あつとせぬエや蓮のほを 東尚  
 桂さけぬささき 賢山  
 白鷺と草もささき 意行  
 りさや若とぬらり 七里  
 七里

七里詩

能存の矢田よりさき 云尔







一重舟越し一重のあはれを  
かき流すやうなうととらふ  
流 川流  
又晴や物憂かゝる杖の  
影 暈 暈  
入おやまらぬあはれは  
逢山 逢山  
水底のあはれは  
明之 明之  
かの花うらみおと陣の  
竹葉 竹葉  
あはれは  
酒之 酒之

橘園 橘園  
や竹の香 橘園  
井園 井園  
一城とあはれは  
呂指 呂指  
あはれは  
生化 生化  
ねほのけしは  
固筆 固筆  
世のあはれは  
逸筆 逸筆  
またかくに  
山雲 山雲  
そよ水の行や  
芦村 芦村



功重千屏風の心からぬ里 世朴  
 申方とみまらねたや 石屋 存九  
 り林のやうに意あり 掃の所 和荆  
 ねんのもおらるや 水伝む 有已  
 わうものぬくにるをりや 神れ 鶴菊  
 浦のるはてもおらるちりり 世家  
 ちよ此はちこもいなる 船くれ 長雨  
 牛より有にぬらう 宮のや 多味

花る此信乳、梅と瘦りり 司鮭

越前之部

之因

名月や花よふやむむるの後 依免  
 夕立の尻のおさくやあやき 季和  
 批灯の可くぬもあやし 信也  
 ちりる名よきははらふと風は 所南  
 ちりる名よきははらふと風は 西



供舟やる魚ふらうと又ましく  
好まらぬやうなるにこそ帯  
花舟より甚書もあらうと書  
みぬるやちよのたまたま  
花七や城もやと  
昨日

福后

山さりの尾しとまぬや  
さるや  
六和  
許遠

房りのく神よあふとく  
一歩り  
下弦の盡れぬると  
おきや  
くらむり  
おのり  
後中よりと  
るの所て



白田もあつらありはく麻の葉  
利熟もあつらありはく麻の葉  
はくもあつらありはく麻の葉  
梅もあつらありはく麻の葉  
肌もあつらありはく麻の葉  
奥もあつらありはく麻の葉  
宇合もあつらありはく麻の葉  
ほくもあつらありはく麻の葉  
山只  
山流  
山只  
山流  
山只  
山流  
山只  
山流

味もあつらありはく麻の葉  
むらもあつらありはく麻の葉  
まもあつらありはく麻の葉  
味もあつらありはく麻の葉  
むらもあつらありはく麻の葉  
まもあつらありはく麻の葉  
味もあつらありはく麻の葉  
むらもあつらありはく麻の葉  
まもあつらありはく麻の葉

存中

園のおの頼もる月お裁 遠近  
枯木もあつらありはく麻の葉 在案  
厚雪もあつらありはく麻の葉 文枝  
水もあつらありはく麻の葉 可九



春秋とてしるにるを柳よみ 明浦  
 詩人の歌へんは火燈を分 孩童  
 かまひの心くすのささけは 九黒  
 きの葉もかやみ柳の月共 吾陸  
 お月の花と踏りけり 好山  
 きはるはく牛も眠るや 之水  
 天師のふれりまを書や 之隣  
 へ山ややふおるま 沈心

春のうしろもやあな月 秋葉  
 ねのねいささやまの色 柳音  
 せーさちまはく風の懐哉 田的  
 輝かしくはくしおの月お 柔木  
 柳よのあらうや武末も 柳鼓  
 今も屏の花やとるや 梅摘  
 歳暮の心姫もあはるのむ 瓦枝



敦賀

八重しはくくろあ九重の晒くれ有文  
買ひとりきりこの清りしは二秋  
素たそに股まらやち樽  
取あり桂やまのあうりお雨揚  
白ぬや秋もろく唐辛子里杏  
中よりもたさちや猫ふむ蟹紀白  
上よりとりとたへ底あよ新糸糸車吾

梅子や首流のりくたの地 徐未  
さんちや此締る物の思ふは揚周  
切火やんち猿のそをより 車言  
買入りも所の産とけり和詩の 登舟  
山買くら取者さの産のり 東怒

伊勢く部

山田

磯姫のけりもをたよのお成 新如



照あたる山海や百金のおは  
摘菜うたわらわらわら小鉢  
冬枯の中にならうや赤はなま  
投じま様くまわり園哉  
栗の花はくや枝子のまの極  
藤の昔はくくぬ山と中  
乙由

了見農之部

改阜

見世物のおおはくのお味  
白妙の豆府おねをく  
娘もさく瘋てあるふ花  
蒲公黄や美りすれり花  
松凡のくくると邪さく時  
秋と月くくると柳の  
おのくとすく  
七賢も筆竹や先と後



とつほひもや柿の村おま  
おつよあかぬ餅の火もぬ  
江  
事

竹と鼻

遠山の暮やせらるる班子  
おしるや松枝けりまの上  
舟人の月と大河あはれ  
山びらけのけりけりけり  
雨の竹と身と竹とや毛の秋  
其拍  
規公  
事

ゆきふらふらと睡れ白鬼  
せんくもえらりて水と鉄哉  
水石

北方

木の葉に雪くくくねる二重  
猿のよもまきとて供やうと  
聲掃よゆきまの  
之味探の中や針の糸  
おのやうかむ時多  
神



神あまのまゝのつらねをまの  
 上 水也  
 花よりいとと自慢や後孫也  
 本実  
 歌よれのあまのこゝろ  
 和智  
 心人のいらぬやとるの属  
 其梨  
 山まのきりし花の霞の賣  
 里紅  
 いそ者やちいさくはつ  
 葉泉

園

花友や一おらあめおの  
 西跡

ん風をや世と捨人の書  
 のま  
 蓮のまよはしきなる  
 新のお帯  
 水辺のまよはしきなる  
 松支  
 風よおのまよはしきなる  
 松  
 人あつたのまよはしきなる  
 村おま  
 凡花のまよはしきなる  
 や又涼  
 木調  
 洪掃のまよはしきなる  
 花の  
 白敷子のまよはしきなる  
 如縁  
 只風



あの子らよとやかり孫懐懐之  
きよよ新のたふの表よあけ  
きよやうおむんとしきう袋  
しと筒よかふらふまふあめん  
角呂

麻生

浪舟をりや今や磯よる  
細くくとも色あつた雪のむ  
猿猴のまもぬらうやあけ月  
松老

日の因らふ雲や入のみの梅 雲  
霞面とらふやちうけし 雲松 二毛  
うらまぬらんや風の糸柳 水天  
ふ益しうけてや月と雪の海 松寸

伊尾

耳よりしらの垢やむの淋 雲巾  
弘けの水よあむや柳陰 泥虫  
古泥や音あふく水よあめ月 春山



いろくし梅をあら 利を中目 梅之  
早候の梅やあなうし一葉の 響行  
柳吹のく尾あふのふ船載 冬葉  
浪の音にありあるおの浪川中馬 批仙  
花もちらり月もちらり込ま田 光純  
梅もくくし空をくくま 柳舟休 只白

山縣

極糸の行とのみくやうの念佛 野航  
名月やかつら了男此土俵入 東羽  
初秋や花さらし浪の浅原川 馬岐  
あぢれくももの空あし柳哉 右靴  
るの川とあしと柳やみ月あ 六之

結願

存もらるもろあつとすられ 白狂  
百重心



○諸国文通之部

奥州津輕

之月とらりまらくのまを吹哉 素文  
 夜静りのあしのまをよみ 梅の花 哩之  
 んかむに辰のあしのまをよみ 其曉  
 神をにらまらくのまをよみ 蓮葉  
 水桶と汲たぐのまをよみ 不可  
 秋風やそらくのまをよみ 知氷

後妻やのまをよみ 行とる 善哉  
 川瀬のふちくのまをよみ 柳系 風舟  
 是れ心のまをよみ 藤のゆま 和心  
 妹のまをよみ 田植哉 去行  
 猿も木のまをよみ 舟のま 帰舟  
 今のまをよみ 舟のま 文柳  
 故のまをよみ 舟のま 蘭緑  
 幸のまをよみ 舟のま 沮六



羽州秋田 追善五句

雙文林供養と稱と

和雪

吾輩の端とをさるや山はく

招魂賦と感と

昨非

言のまふと廣くやねる世世の

孫正記とらむ

柳枝

世と喜ふかたれと夏は枯れ

西上人秋とらむ

也瓢

花のゆりはと浄むるうれは

幸崎の二句と讃と

也柳

器世界と抱ありはと勝雲

羽州天皇

追善四句

きりや平たわりの塚の海 葉香

一かゝる道のとくや香の 一思

とをひさかたと柱おのの 巴水



三書  
雪のおやまゝの梅の津田の  
芳水

羽州鶴屋

削れし人々を馴して子哉 五葉  
酒のさしよきから徳のむ 竹袖  
ふ行やまはちのておそ 一通  
淡雪の非らわきき 葎摘 和蕙  
早合の流りりや月の入か城 吳天  
いそちの桐よと稔の鳩と家 如殿

新妻やまき帯のまゝはる風 序松  
まら部のちりけの跡やまを梅 只白  
八朝やまらくの雪首はあま子 千峯  
孫系の成体まゝるしおひ 戸錐  
船のてし中子まらまは 巴文  
大ののあまらまかてあやち哉 燕雨  
おろしれはる肥くる柳哉 龜游  
まららまの雪月まら月やまら 一荷



きしとれぬと振と化とすもの事 凡七

佐州志比次

石灯の縁をわら切あまのこ 如千  
 深あゝゝふりひひー水は花 如角  
 風よはれくまふちうきく鶴 舎目  
 鶴の巣とあふくぬ燕 赤子唐  
 三りとおちたあま片も 和乙  
 り花の記ふらなるぬ柳哉 秀白

能清のまきとくおやえはれ 南秋  
 能清とる希あひひく梅哉 素雪

遠州水久保 追善七句

おちりく花やきく 軒好  
 毛ねもいふ心とく 和言  
 双林のまむやあゝ 新川  
 みるく 正子  
 能清のせき 白駒



海にむる碑きふも一帯し 苦行  
花さめの中はさや月と雪 菊川

肥後熊本

舟の夏もききめし 蜀魂 又凍  
漆朱の手は花のれやみり知 一笑  
空彼中の舟はしら 雪の花 観午  
洲の音梅よここえくをい 女雪  
ゆいさくらあは撫さるや冬のま 女市

宇土 追善二句

假名の碑の舟はゆい 洲月 僧 翠  
八代 追善二句

不かりりりや月雪あまうけ 石 徹見

豊後玖珠 追善二句

魚管のぬりりと音藤也まの 智 馬貞  
雪のゆや道一ゆい 藤のあ 世隣



石州山後 近善三句

空際のやうに雲のあつたふり 一番  
清わうの霞の棧へ玉あられ 未曉

石州大田

山伏の貝とやうくや木根の花 葉之  
水伝や花の芽は兒おこち 岩水  
流るい遊女の袖に籠ね哉 秀竹  
あはれや流る水さげの草の 一葉

げお涼し けりさあ秋のちの 色 氣

市山 近善三句

花梅やうきまゝかへるるに 玉水  
折とわくし 山後や山標 音山

仙前山

所ととあはれくさるる 梅林  
都をくの故をや意ふ 和磁  
三子の子のたうし 巨流



襟の氣のうららかなるや柳の心直淋  
一葉のゆえや思ふにやるお葉顔  
る月のまおあつてや根葉益苦葉

追善之句

白糸の船もちるやゆめの雪 柳水  
湖の水や矢まの筆けり 軍水  
又竹の風も吹さるや麻の中 梅子

播州旅路

川舟やかねらるるや梅の花 吾解  
遠も此はふと涙しやれは山 三羅佳  
かきとるや灯さるし 夜は秋 天秋  
よよのもしろおらり塔の音 夢夜  
ぼつとく ぼつとくあふふ 小節哉 史幸  
海らきこあふふと都や秋の 吾木  
衣よのむしう 向たや大根舟 尾風  
秋代くまをとき ぬ秋物外 千柯



江浮の根のあしうしとていふ  
折く角りはまも加せ席のあり  
む猿ふも奥よりむ神時雨  
之石

○牌前香花之部

點草 前書畧之

一筆下

年とては人とのたの月然々  
雷百りけきひく桂の又大圭

志ふ甲如をそとにほ毛紋 柳水  
花の香を月のみりやひの本草 分草  
懺比の古鼓ゆりより花の法 素雲

そ国 二十余ヶ国  
そ所 七十余ヶ所  
そ人 千二百余人



花鳥満ちた笑

二月十五日

饗宴礼式

一 汁二菜

魚鳥類二品  
精進物一色

一 酒二献

盃可任勝手  
好肴不及乱

一 茶甚旨

茶屢可試濃  
甚茗有傳埋火

宿坊

蓮三

姐板やうらうら柳のつらみあり

奉行

吾仲

熱立やまきつらうらまきら了

知客

花字

精との胡や守井の芳のむ

茶改

井字

井の筒をのふと一桶の花の枝



配膳

櫛浴

燕やもつ子もはねるよひも

列座 十二人

花よりそ尾と酔をさへみり  
あり 巴静  
あり 近江  
あり 兼陀  
あり 兼陀  
 之るよせむのむとひるも探うれ  
あり 兼陀  
あり 兼陀

後野もゆりのあふち揚うれ  
尾張 以之  
 ちんばやちよちんばく  
兼陀 里紅  
 柳も軟まうまあるりて哉  
同 兼陀  
 新とのられあくりや酢酢  
兼陀 兼陀  
 小津もあふち揚うれ  
同 兼陀  
 吸おとゆとららてまふれ  
同 兼陀  
 豆音あふちらら鯛も揚哉  
兼陀 兼陀  
 柳もあふちらら鯛も揚哉  
兼陀 兼陀  
 柳もあふちらら鯛も揚哉  
兼陀 兼陀



規板やせいの花さよふまゝ二筋近江伏角  
花鳥の字はちりりやはく了願願多願多願多

享保十年

六月下旬

京寺町押小路

檜屋治兵衛板



